The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウイグル文「成宗テムル即位記念仏典」出版の歴史的背景 : U 4688[T II S 63]・*U 9192[T III M 182]の分析を通じて
Author(s)	中村, 健太郎
Citation	内陸アジア言語の研究. 2006, 21, p. 49-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/15919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウイグル文「成宗テムル即位記念仏典」出版の歴史的背景
——U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] の分析を通じて——

中村健太郎

はじめに

19世紀末～20世紀初頭に，各国の中央アジア探検隊が敦煌やトゥルファンなど東トルキスタン地域から将来したウイグル語仏教文献は，13～14世紀，つまりモンゴル時代に属するものが多数を占める．ウイグル語仏典には，通常末尾に奥書 (colophon) が付されるが，ここには，当該仏典が書写ないし出版された経緯や関係者に対する功徳回向文，更には施主の名前，日付が記入されていることが多い．モンゴル時代のウイグル語仏典に付属する奥書の中には，同時代史料との繋がりを示してくれるものがある．こうした同時代史料を視野に入れ，奥書をモンゴル時代史の史料として扱うことで，従来主に文献学の対象として扱われていた13～14世紀のウイグル語仏教文献を，モンゴル時代史の中に位置付けることが可能となる．この作業は既に各国の学者によって行われているが，私の関心はこれをより積極的に押し進めることである．幸いにも，本誌においてこのテーマについて連載する機会を与えられたので，本号を含め三回にわたって，モンゴル時代のウイグル語仏典の奥書に関わる諸問題を扱いたい．

本稿で取り上げるのは，二点のウイグル語印刷仏典の奥書断片 U 4688 [T II S 63] と *U 9192 [T III M 182] である．ウイグル語印刷仏典は現在の学界ではほぼモンゴル時代に属すると考えられているが，二点の奥書はいずれもモンゴ

ル帝国第6代皇帝成宗テムル（在位1294～1307年）の即位に言及し，モンゴル時代史の立場からも非常に興味深い史料となりうる．

U 4688 [T II S 63] は，文書番号より，ドイツの第二回トゥルファン探検隊（1904～1905年，隊長 A. von Le Coq）によってトゥルファン盆地のセンギム Sängim 遺跡で獲得されたことが分かる．現在，文書の現物はベルリン=ブランデンブルク科学アカデミー（BBAW）に所蔵されている．1967年，Gabain 氏は，その著書 *Die Drucke der Turfan-Sammlung* の中で解読研究を付した上で，この奥書を学界に初めて紹介した．彼女はこの奥書が頭韻を踏んでいることを見抜き，その形式を再構成した．これに対して Kara 氏は，Gabain 氏の行った再構成は誤りであり，この奥書が実は頭韻四行詩であったことを，Gabain 論文に対する書評の中で指摘した[(1)]．U 4688 [T II S 63] は一紙が三つ折りにされた折本の断片である．私は本文書を実見していないが，Gabain 論文によれば，寸法は25.5 cm × 32.7cm であるという．

一方，*U 9192 [T III M 182] については，文書番号より第三回トゥルファン探検隊（1906～1907年，隊長 A. Grünwedel）によってトゥルファン盆地のムルトゥク Murtuq 遺跡で獲得されたことが分かる．ただ，現在，文書の現物は行方不明になっているという[(2)]．*U 9192[T III M 182]を紹介した Sertkaya 氏は，Arat 氏の遺品に含まれていた写真によって解読を行ったという．現物が行方不明である以上，遺憾なことに本文書の古文書学的情報の詳細については不明である．ただ，Sertkaya 氏が掲げた写真より，U 4688 [T II S 63] と同様，三つ折りにされた折本の版本断片であることが分かる．また，頭韻四行詩で書かれており，各行の終わりは二点，各節の終わりは四点の句読点が付されている．

---

(1) Kara 1968, p. 206; Zieme 1975, p 189, n. 11; Zieme 1991, pp. 353-354.

(2) T III M 182 は戦時中に紛失してしまったらしいが，現在ではこうした現存しない文書にも，アステリスク（asterisk）付きの新しい文書番号が付されていることを，ベルリンに滞在中の笠井幸代氏を通じて S. Raschmann 氏から情報提供いただいた．ここに記して感謝する．従って，本稿では *U 9192 [T III M 182] と表記する．

Gabain・Sertkaya 両氏の研究はあくまで文献学的視点に基づいた解読研究であった．しかし私の見るところ，これら二点の奥書は歴史学的に極めて重要な意味を持つものである．本稿において私は，二点の奥書に関わるいくつかの問題に触れた上で，これらをモンゴル時代史の中に位置付けてみたい．

第１章　U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] のテキスト・訳注

テキストについては，便宜上，本来のものと頭韻四行詩形式に直したものの両方を提示する．和訳は頭韻四行詩形式に直したものに対して付す．

Text A (Plate I)

[文書番号] U 4688 [T II S 63]

[研究] Gabain 1967, pp. 20-23; Zieme 1992, pp. 74-75.

[写真] Gabain 1967（Turfanforschung の Digitales Turfan-Archiv で公開されている．
http://www.bbaw.de/forschung/turfanforschung/dta/u/images/u4688.jpg）

1 kim ol ašnu-dïnbärüki törümiš ilig-lär-tä q̈an-
2 lar-ta : ayaz-lï yaγïz-lï-ča anunmïš ašunmïš :
3 artuq buyan-lïγ a̧lp yu̧räklig
4 činggiz q̈aγan-nïng : ayïγ-lïγ qan-lar ulaγ-ï
5 altïnč käzig-tä :
6 činggiz q̈aγan-nïng čïnlayu bilgä oγ̈ul oγulï : čitan-ï
7 aṭruq
8 säčän qaγ̈an-tïn törümiš : čintamani ärdini-täg yig
9 aṭruq
10 činkim tayšï-lïγ q̈ang-ta blgürmiš : öngräki iltinü

11 kälmiš buyan-ïn körsär : üküš-kä taplatïlmïš maxa-

12 sanpadi q̈an täg buyan-lïγ : ög q̈ang täg bodun-q̈a

13 umuγ bolur-ïn körsär : üzäliksiz burxan täg

14 yrlq̈ančučï kọngül-lüg : äsirgänčsiz ṭidim-lig BWYŠ kọngül-

15 lüg : il-kä asïγ-lïγ tüz köni törü-lüg : il

16 ärdini-si ïduq uÿuš-luγ

17 tämür qaγan

18 ïduq säčän q̈aÿan-nïng orun-ta olurup ikinti

[頭韻四行詩形式]

kim ol

ašnu-dïnbärüki törümiš ilig-lär-tä q̈an-lar-ta

ayaz-lï yaγïz-lï-ča anunmïš ašunmïš

artuq buyan-lïγ ạlp yụräklig Činggiz q̈aγan-nïng

ayïγ-lïγ qan-lar ulaγ-ï altïnč käzig-tä

Činggiz q̈aγan-nïng čïnlayu bilgä oÿul oγulï

čitan-ï aṭruq Säčän qaÿan-tïn törümiš

čintamani ärdini-täg yig aṭruq

Činkim tayšï-lïγ q̈ang-ta blgürmiš

öngräki iltinü kälmiš buyan-ïn körsär

üküš-kä taplatïlmïš maxasanpadi q̈an täg buyan-lïγ

ög q̈ang täg bodun-q̈a umuγ bolur-ïn körsär

üzäliksiz burxan täg yrlq̈ančučï kọngül-lüg

äsirgänčsiz ṭidim-lig BWYŠ kọngül-lüg

il-kä asïγ-lïγ tüz köni törü-lüg

il ärdini-si ïduq uÿuš-luγ Tämür qaγan

ïduq Säčän q̈aÿan-nïng orun-ta olurup ikinti

[和訳]

過去より以後に生まれた諸王・諸カンよりも，

蒼き（天），褐色の（大地）のような，凌駕し，優れた

この上ない功徳を持ち，勇敢な心を持つチンギス=カアンの

威厳ある諸カンの王統の第6番目において，

チンギス=カアンの真に賢い孫であり，

その意思が卓越したセチェン=カアンより生まれ，

如意宝珠の宝のように優れ，卓越した

チンキムという太子（の位）を持つ父のもとに現れた，

前世にある運ばれて来た功徳を見れば，

多くの人々に認められた大三末多王のような功徳があり，

父母のように民衆に救いとなっていることを見れば，

至上なる仏のような慈悲心を持つ，

吝嗇なき王冠を持ち，BWYŠ の心を持ち，

国に利益あり，平等で正しい法を持ち，

国の宝であり，神聖な家系に属するテムル=カアンは，

神聖なセチェン=カアンの位に就き，第2・・

［語注］

2. anunmïš：Gabain 氏はここを ''NWNMYŠ と翻字 (transliteration) し，anunmïš と転写 (transcription) していた．動詞 anun- は普通「準備する」の意であり[3]，Gabain 氏はそのように訳しているが，それでは意味が通じない．これに対して Röhrborn・Zieme 両氏は，この箇所を ärtmiš と読み直した[4]．私も Röhrborn・Zieme 説を支持し，「凌駕した」と和訳する．従って，ärtmiš とこの後に来る ašunmïš「優れた」とが次の行の buyan「功徳」にかかるものと解釈する．

4a. činggiz：言うまでもなくモンゴル帝国の初代皇帝チンギス=カンのこと．ここでチンギスの名の直前で改行・平出が行われている事実は重要である．この箇所以外にも，同様の現象が，6 行目のチンギス，8 行目のセチェン（クビライ），10 行目のチンキム，17 行目のテムルの名の直前においても見られる（以下，モンゴル帝国の王統については，p. 89 の**関係系図**を参照）．ただし，18 行目のセチェンの直前では行われていない．改行・平出が行われていることについては Gabain 氏も指摘しており，彼女はこれを「敬意の間隔（Respektabstand）」と表現していた．ウイグル語印刷仏典の奥書において大カアンの直前での改行・平出は一般的に行われるが，これは同時代史料であるモンゴル時代の漢文・モンゴル語史料に一般的に起こる「大元ウルス書式」と共通するものである[5]．

4b. činggiz q̈aγan：ここでやや奇妙に思われるのが，チンギスの称号が，U 4688［T II S 63］ではここと 6 行目で qaγan（パクパ文字モンゴル語文献では qa'an）と表記されているのに対し，*U 9192［T III M 182］の 8 行目では qan とされている点である．このように，両版本間でチンギスの称号が統一されていないのは何故であろうか．

---

(3) *ED*, p. 188.

(4) *UW*, pp. 160-161; Zieme 1992, p. 74.

(5) 「大元ウルス書式」については，cf. 中村（淳）& 松川 1993, pp. 15-22.

今日の学界では，チンギスが持っていた称号はあくまでqanであり，qaγan～qa'anの称号を初めて用いたのはオゴデイであるとする点については異論がない.[6]

モンゴル時代の蒙漢合璧命令文の体系的研究を行った杉山正明氏は，蒙漢合璧命令文やパクパ文字モンゴル語命令文の中に，本来qanであったはずのチンギスに対する称号をqa'anとしている例が少なくとも5件存在していることを指摘し，そのうち1件についてはqa'anと表記される理由を確定できないが，これ以外の4件については軽率なミスである疑いが濃いとして，元代にチンギスの称号の表記法がqanとqaγan～qa'anの両様あった可能性を排除した.[7]

しかし，杉山氏が挙げた命令文の例以外にも，14世紀のウイグル語・モンゴル語文献の中には，U 4688 [T II S 63] を含め，チンギスの称号をqaγan～qa'anとしている例がいくつか存在する．ウイグル語史料では，河西地方に拠っていたチャガタイ王家のノムタシュNom Taš太子が1326年，粛州に建てさせた「重修文殊寺碑」には，チンギスの称号がqaγanとして見える.[8] またモンゴル語史料では，1312年にアユルバルワダの命令で刊行されたモンゴル語印刷仏典『*Bodhicaryāvatāra* の注釈』の奥書に，チンギスの称号がqaγanとして見えるし，[9] 1305年，フレグ=ウルスのオルジェイトゥ Öljeitü がフランス王フィリップ四世に宛てた書簡の中でもチンギスはqaγanと明記されている.[10] これらの文献においてチンギスの称号が何故qaγan～qa'anと表記されているかは俄かには定めがたいが，あるいは，Rachewiltz氏が言うように，クビライ以降qaγan～qa'anの称号が大元ウルス皇帝の称号として定着すると，これが遡及的にチン

---

(6) Pelliot 1930, p. 25; Pelliot 1959, pp. 302-303; Krader 1955; Boyle 1956, p. 152; *TMEN* III, No. 1161, pp. 141-179; 村上 1970, pp. 7-8.

(7) 杉山 1987, p. 28, n. 6; 杉山 1989, pp. 13-14.

(8) 耿 & 張 1986, p. 257, *l.* 2. ここに掲げられる写真は判読しづらいが，確かにX'X'Nと書かれている.

(9) Cleaves 1954, p. 54.

(10) Mostaert & Cleaves 1962, p. 55.

ギスに対しても使われた場合もあったのかも知れない[11]．言い換えれば，元代になると，大元ウルス皇帝が qaγan ~ qa'an と呼ばれたことに影響されて，チンギスの称号は本来 qan と表記すべきだという規範が必ずしも厳格に守られない場合があったのではないか．後述するように，私は U 4688 [T II S 63] の年代を 1295 年に比定する (Cf. **Text A**, 語注 18a)．*U 9192 [T III M 182] もほぼこれと同時期と考えられる．従って，このような状況が U 4688 [T II S 63] や *U 9192 [T III M 182] にも如実に現れたと思われる．

4c. ulaγ：ulaγ の本来の意味は「つなぐもの」である[12]．私はこれを「王統」と訳した．Gabain 氏はこれを「世代 (Generation)」とドイツ語訳している．

5. altïnč käzig-tä：テムルがチンギス，オゴデイ，グユク，モンケ，クビライの後継たる 6 番目の大カアンであることを示す．なお，*U 9192 [T III M 182] の 8 ～ 9 行目にも，činggiẓ qan ulaγ-ïnta ayïγ-lïγ qan bolÿu-q̈a altïnč käzig-tä「チンギス=カンの王統において威厳あるカンとなるために，第 6 番目において」と同様の表現がある．

6a. čïnlayu：「如実に；真実に」の意．čïn は漢語「真」の音写．Gabain 氏のドイツ語訳からは，彼女がこの語に対していかなる解釈をしているかは読み取れない．形としては，čïn に動詞形成要素 -la と連用形の語尾 -yu が付いたものと見なしうる．しかし，ここでは「真実に」と副詞的に解釈すべきである[13]．従ってここは，「チンギス=カアンの真に賢い孫」と訳せる．Gabain 氏はこの箇所を，činläyü のように前舌音 (front vowel) として転写しているが，Zieme・Kara・庄垣内氏に従い，後舌音 (back vowel) と解しておく．

6b. čitan-ï：Gabain 氏はここを ČYT'YY と読み，これがサンスクリットの jeta「印章」か，jātya ないしそのヴァリアント jātaya「高貴な」と関連づけられるとした．しかし，私はこの見解には従えない．これに対して Zieme 氏は，この

---

(11) Rachewiltz 1983, pp. 273-274.

(12) *ED*, p. 136.

(13) Zieme & Kara 1978, p. 216;『阿毘達磨』2, p. 261.

箇所を ČYT'NY と読み，モンゴル語の動詞 čida-「～できる」に -n がついて副動詞形となり，これに三人称の人称語尾が付いたものと解釈し，この語に対して「固い」という訳語を与えた．その上で，「その堅固さが卓越したセチェン=カアン (Sečen Xaγan, dessen Festigkeit besonders ist)」と訳している．[14] 写真を見る限りでは，この箇所を ČYT'NY と読むことは可能で，私はその Zieme 氏の読みには従いたい．ただし，čitan に対する私の解釈は，モンゴル語で解こうとする Zieme 氏のそれとは異なる．

čitan という語は，13 世紀中頃に安蔵 (uig. An-tsang) がウイグル語訳した『大方広仏華厳経』(大正蔵 No. 293, Vol. 10, pp. 661-851) の中に在証される：alq̈u bodistv-lar-nïng bk yrp čitan-lar-ïn yarutur-lar tuÿurur-lar．これに対応する漢訳は，「發明一切菩薩堅固志」である．ウイグル訳の čitan に対応する漢語は，明らかに「志」であり，ウイグル語テキストを解読した百濟・小田両氏は，「一切の菩薩たちの堅固な志を明るくし」と訳している．[15] 両氏は，この čitan が漢訳の「志」に対応していることから，サンスクリットの cetanā に由来するものと考えた．仏教サンスクリットの cetanā とは，中村元『仏教語大辞典』(p. 540b) によれば，「心の動機づけの作用；心がある方面に動機づけられること；志向；意志の発動；思うという精神上の動作」という意味を持つ．従って私は，ここで我々のテキストに見える čitan が，ウイグル語訳『大方広仏華厳経』の čitan と同じくサンスクリットの cetanā に由来するもので，これに三人称の人称語尾がついたものと判断し，モンゴル語で解こうとする Zieme 説には従わない．確かに，モンゴル時代，モンゴル語仏教文献にはウイグル語に由来する仏教語彙が大量に取り入れられる一方で，ウイグル語仏教文献にもモンゴル語からの借用語が見られるようになる．しかし，それは数としては極めて少なく，やはりここはサンスクリットで解く方が自然である．

---

(14) *BTT* XIII , p. 180, n. 51.15.

(15) 百濟 & 小田 1983, p. 188, *ll.* 49-52, p. 192.

なお，付言すれば，ここで čitan などという耳慣れないサンスクリットがあえて選ばれたのは，4 ～ 10 行目が語頭音 č- で始まる頭韻四行詩の一節であり，頭韻を揃えるためには č- で始まる語が来なければならなかったからである．以上の論を踏まえれば，ここでは čitan はサンスクリット起源と考え，「意志」と訳すべきである．

8. säčän qaÿan：周知のようにクビライの謚号で「賢いカアン」の意．クビライは至元 31 (1294) 年正月に死去したが，テムルが即位した一ヶ月後の同年 5 月に，モンゴル語で「薛禅皇帝」という謚号が贈られている．(16)

10. činkim：クビライの次子チンキム．母はコンギラト Qonggirad 氏出身のチャブイ (Čabui 昭睿順聖皇后)．tayši は漢語「太子」の音写．彼は，至元 10 (1273) 年に皇太子となっており，至元 22 (1285) 年に死去した．テムルは，チンキムとその后ココジン=カトン (Kökejin Qatun 徽仁裕聖皇后) との間に生まれている．

さて，ここで問題となるのが，モンゴル帝国の創始者たるチンギス=カンと，その孫で大元ウルスを建設したクビライの二人は別にして，大カアンとなることなく皇太子のまま早逝したテムルの父親であるチンキムが，やや奇妙にもチンギスやクビライと同列にここで言及されていることである．実は，漢文史料にもこのような事例が見られる．テムルは即位してから一ヶ月後の至元 31 (1294) 年 5 月に早速，チンキムを「文惠明孝皇帝」と追尊するとともに，(17) テムル即位の詔(18) にはチンギス (太祖聖武皇帝)，クビライ (先皇帝) だけでなく，チンキム (昭考) も言及されている．テムルの大カアン即位の正統性を強調するために，何故わざわざチンキムがここで言及されなければならないのであろうか．

---

(16) 『元史』巻 17，世祖本紀，至元 31 年 5 月戊午条 (p. 377)．以下，本稿において『元史』の記事を引用する際，全て中華書局の標点本に拠り，その頁数も付記する．
(17) 『元史』巻 18，成宗本紀，至元 31 年 5 月戊午条 (p. 383)．
(18) 『元史』巻 18，成宗本紀，至元 31 年 4 月甲午条 (p. 381)．

これは，テムルの実母であったココジン=カトンの意志が強く反映されているからと思われる．ココジン=カトンはコンギラト氏出身で，クビライの死去に伴って 1294 年に上都で開催されたクリルタイを監国として取り仕切り，テムル政権の発足に当たっては，チンキムのケシク長であったオルジェイ Ölǰei を中心として，主要な宰相はチンキムのケシクにあった者で固めるなど，彼女の意向が強く影響している[19]．また，テムルが病気で政務を執ることが不可能であったこともあり，彼女は皇太后として宮廷において一切の権限を握った (Cf. **Text B**，語注 2)．テムル政権を動かしていたのは事実上ココジン=カトンであったと考えて大過ない．ただ，ここで注意しなければならないのは，彼女の夫であるチンキムは実際には大カアンにはならず，本来ならココジン=カトンは「皇太后」の資格を有しないことである．彼女がテムル政権の実権を握るにはそれだけの正当性が必要であり，実際には大カアン (＝皇帝) に即位しなかったチンキムを大カアンと同列に置くことで，自らの「皇太后」としての正当性を確固たるものにしようとしたのではなかろうか．そのようなココジン=カトンの意図がここに表れたものと思われる．

11-12. üküš-kä taplatïlmïš maxasanpadi ïqan：ここに見える maxasanpadi について，Gabain 氏は，赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』(p. 578b) に拠り，これがサンスクリットの Mahāsanpadi を写したものであるとした．これに対して Franke 氏は，Gabain 説に拠らず，maxasanpadi とは，1278 年にパクパが皇太子チンキムの要請に応じて著した，仏教の世界観・修行法等をコンパクトにまとめた書物『彰所知論』(tib. *Shes-bya rab-gsal*) において，仏教世界の全ての王の祖として登場する伝説の「大三末多王」に当たることを指摘した[20]．私は Franke 説が基本的には正しいと考える．ただし，Franke 氏は，「大三末多王」をサンスクリットの *Mahāsamadi に還元していたが，これは誤りで

(19) 片山 1983, pp. 47-60; 杉山 1995, pp. 100-102.

(20) Franke 1978b, p. 68, n. 137.

あった．そうではなく，Zieme 氏の言うように，*Mahāsaṃmata に当たると考えるのが正しい[21]．

上のように maxasanpadi が「大三末多王」に当たると見る考えが正しいことは，『彰所知論』のチベット語テキストを見れば一目瞭然である．即ち，チベット語テキストでは「大三末多王」は，rgyal-po mang-pos bkur-ba「多くの人々が尊敬する王」と表現されており[22]，これは他ならぬ Mahāsaṃmata 王のことである．ここで我々のテキストを見てみると，maxasanpadi にかかる üküš-kä taplatïlmïš「多くの人々に認められた」という修飾語句が，チベット語テキストの「多くの人々が尊敬する（王）」という表現と対応しているのに気付くであろう．

要するに，ここでテムルは，Mahāsaṃmata（大三末多）王に擬（なぞら）えられているのである．Mahāsaṃmata 王は漢訳仏典では「衆許摩訶帝」などと訳され，民衆によって選挙され，承認されて帝王となった人とされる．ここで Mahāsaṃmata 王がわざわざ言及されているのは，テムルが実際に 1294 年に上都で開催されたクリルタイで大カアンに選出されたことを暗示していると考えることもできるのではなかろうか．仏典出版の主体は，テムルを転輪聖王の一種である Mahāsaṃmata 王に擬えることによって，大カアンの王権に対する権威付けを行い，またテムルの正統性を誇示する意図から，このような文言をここに書き入れたものと考えることができよう．

14. BWYŠ：Gabain 氏はモンゴル語 büšürgel「苦悩」の語幹であるとしたが，推測の域を出ない．仮に BWŠY「布施」の誤りであれば，ここは「布施心を持つ」と訳せる．

---

(21) Zieme 1992, p. 75.

(22) 王 1999, p. 373.

17-18. tämür qaγan ïduq säčän ïqaγan-nïng orun-ta olurup：orun とは「場所，位，王座」の意.[23]「セチェン=カアンの位」とは，大元ウルスの大カアンの位を言うものであろう．詳細は第 3 章において述べるが，U 4688 [T II S 63] 出版の歴史的背景を明らかにする手掛かりとなる箇所である．なお，*U 9192 [T III M 182] の 1 行目もテムルの即位に言及している (Cf. **Text B**，語注 1a).

18a. ikinti：「第 2 の，二番目の」の意．U 4688 [T II S 63] の出版年代を明らかにする上で重要な箇所である．Gabain 氏は，ikinti の後に yïl「年」という語が続くと推定した．ただし Gabain 氏は，U 4688 [T II S 63] の年代については，これがテムルが生存している間に書かれた，と指摘するに止まった．Gabain 氏の後にこの年代について論じたのは Zieme 氏であった．氏は ikinti の後に yïl が続くという Gabain 説を踏襲し，更にその後に「印刷した」というような文言が続くと考え，出版年代を 1296 年に比定した.[24] つまり Zieme 氏は，U 4688 [T II S 63] の年代がテムルが即位してから二年後であると考え，1294 年に 2 年を加算して，1296 年に出版されたものと考えたのである．

私も Gabain 氏と同様，ikinti の後に yïl が来る可能性は極めて高いと考える．ただ，ikinti という語に関して Zieme 氏の解釈は果たして可能であろうか．そもそもウイグル語の ikinti とは，あくまでも「第 2 の，二番目の」という意味である．従って，テムルが即位した 1294 年を「最初の年 (first year)」とし，その次の年，つまり 1295 年こそが「第 2 の年 (second year)」に当たると考える方が正しく，私は，U 4688 [T II S 63] の年代を，Zieme 説を訂正して 1295 年に比定したい．

---

(23) *ED*, p. 233.

(24) Zieme 1981, p. 388; ツィーメ & 百濟 1985, p. 30; Zieme 1992, p. 74.

Text B

[文書番号] *U 9192 [T III M 182]

[研究] Sertkaya 1989

[写真] Sertkaya 1989

1 orun-ta oluru yrlïq̈amïš : agiramakiši uluγ q̈atun-ï

2 buluγan qatun ∴

3 ada-lïγ munï täg ödtä q̈olu-ta : ada-ta umuγ bolup

4 ara turdačï : adaq song-ïnta/////

5 umuγ bolÿu-q̈a tïltaγ PWL/////

6 xung tay xiu-luγ ög ana-ta tuγmïš blgürmiš ∴

7 kim ol alq̇u-ta kötitmiš aÿïr buyan-lïγ : aṭruq törümiš

8 činggiẓ qan ulaγ-ïnta : ayïγ-lïγ qan bolÿu-q̈a altïnč käz-

9 ig-tä : akaš-tïn inmiš adïnčïγ blgürmiš ∴

10 köni törü-lüg yrlïqančuči kọngül-lüg : kötitmiš uluγ buyan-lïγ

11 **qaγan** qan-ïmz : köni törü-čä arq̈a čambudivip uluš-uγ :

12 **küz**ätip ärksinip ilänür uÿur-ta ∴

13 aṭruq törümiš adïnčïγ ïduq bo

14 q̈aγan qanïmïz birlä : aẕunlar sayu ạmrašu kälmiš abiyaẓ

15 /////lig-intin : ạmtï šï alq̈u-ta kötiḍip altun **uruγlarï**/////

[頭韻四行詩形式]

a-///// orun-ta oluru yrlïq̈amïš

agiramakiši uluγ q̈atun-ï Buluγan qatun

ada-lïγ munï täg ödtä q̈olu-ta

ada-ta umuγ bolup ara turdačï

adaq song-ïnta ///// umuγ bolÿu-q̈a tülaγ PWL/////

a-///// xung tay xiu-luγ ög ana-ta tuγmïš blgürmiš

kim ol

alq̇u-ta kötitmiš aÿïr buyan-lïγ

aṭruq törümiš Činggiẓ qan ulaγ-ïnta

ayïγ-lïγ qan bolÿu-q̈a altïnč käzig-tä

akaš-tïn inmiš adïnčïγ blgürmiš

köni törü-lüg yrlïqančuči kọngül-lüg

kötitmiš uluγ buyan-lïγ qaγan qan-ïmz

köni törü-čä arq̈a čambudivip uluš-uγ

küzätip ärksinip ilänür uÿur-ta

aṭruq törümiš adïnčïγ ïduq bo q̈aγan qanïmïz birlä

aẕunlar sayu ạmrašu kälmiš abiyaẓ /////lig-intin

ạmtï šï alq̈u-ta kötiḍip altun uruγlarï/////

[和訳]

(テムルは) 位にお就きになった.

大カトンはブルガン=カトンである.

災難あるこのような時に，
災難において救いとなり，間に留まるであろう．
最後に‥救いとなるために原因‥
皇太后（の位）を持つ母において生まれ現れた．

全てにおいて超越した重き功徳を持ち，
卓越して生まれたチンギス=カンの王統において
威厳あるカンとなるために，第6番目において
虚空より下り，特別に現れた．

正しい法を持ち，慈悲心を持ち，
超越した大いなる功徳を持つ我らがカアン陛下が，
正しい法に従って全閻浮提国を
守り，支配する時に，

卓越して生まれた特別で神聖なこの我らがカアン陛下とともに，
生まれ変わる度に慈しみ合って来た習慣‥
今，全てにおいて超越し，黄金［種族］‥

［語注］

1a. orun-ta oluru yrlïqamiš：「位にお就きになった」と訳す．その主語は，Sertkaya 氏と同様に私もテムルであると解しておきたい．

1b. agiramakiši：Sertkaya 氏と同じく，サンスクリットの agramahiṣī「后」に由来するものと考える．

2. buluγan qatun：ブルガン=カトン．バヤウト Baya'ud 氏出身で，テムルの后．テムルの実母であるコンギラト氏のココジン=カトンが大德4（1300）年

に死去すると，テムルは病気で政務を執ることが不可能であったこともあり，彼女が宮廷で一切の権限を握ることになった．それに伴って，1302 ～ 1303 年にかけて，コンギラト派の宰相のほとんどが交替し，バヤウト派で占められることになる[25]．このようにブルガン=カトンが第一皇后として実権を握ったのは 1300 年以降であり，ここにブルガン=カトンの名があからさまに現れることに疑問が残る．*U 9192 [T III M 182] の年代は U 4688 [T II S 63] のそれよりも若干後 (1300 年以降) である可能性も残しておきたい．

6. xung tay xiu：漢語の「皇太后」の音写．ここでの皇太后とは，疑いなくココジン=カトンを指す．彼女はコンギラト氏出身で，チンキムの后，テムルの実母であった．1294 年 4 月，テムルは上都のクリルタイで大カアンに推戴されるが，このクリルタイはココジン=カトンが監国として上都で開催したものであった．彼女はテムルの即位とともに皇太后となった (Cf. **Text A**，語注 10)が，1300 年に死去するまで，病気がちであった大カアンのテムルを抑え，実権を握っていた．

8-9. altïnč käzig-tä：Cf. **Text A**，語注 5.

11-12. köni törü-čä arq̈a čambudivip uluš-uγ küzätip ärksinip ilänür：čambudivip とはサンスクリットの jambudvīpa (閻浮提) からの借用語．閻浮提とは我々の住む世界を意味し，南贍部州とも呼ばれる．ここでテムルが仏法によって閻浮提を守るということが述べられているが，これは明らかに転輪聖王の特徴を述べたものである．転輪聖王とは正義をもって世界を治める王で，金・銀・銅・鉄の 4 種類があり，金輪王は四大洲全てを治め，鉄輪王は閻浮提のみを治めるという[26]．つまりここでテムルは転輪聖王に擬(なぞら)えられているのである．実は最近の研究でクビライ時代，パクパがクビライを転輪聖王に擬えることによって大カアンの王権強化を図っていた事実が明らかになりつつある[27]．

---

(25) 植松 1968, pp. 50-54.

(26) 『岩波仏教辞典』東京，岩波書店，1989, pp. 599-600.

(27) Franke 1978b; 中村 (淳) 1993; 石濱 1994; 中村 (淳) 1997, pp. 130-137.

テムルがクビライ同様，転輪聖王とされている事実は極めて重要である．このことについては，本稿第3章において述べる．

14. q̈aγan qanïmïz：当然ながらテムルを指す．しかし，ここで注意すべきことは，テムルが，U 4688 [T II S 63] では tämür qaγan とその実名が表記されているのに対し，ここでは qaγan qan とされていることである．ただ，他のウイグル語印刷仏典の奥書では，治世中の大カアンの実名が書かれることはなく，qaγan qan とのみ表記される方がむしろ普通である．

第2章　ウイグル語印刷仏典の年代と出版地

(1) ウイグル語印刷仏典の年代の上限——「中都(Čungdu)」問題——

第1章の訳注において，私は U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] の出版年代について議論したが，ここでその議論を総括しておきたい．私は U 4688 [T II S 63] の年代を，テムルが即位した翌年の 1295 年に確定していた (**Text A**, 語注 18)．一方，*U 9192 [T III M 182] には，直接その出版年代を示す日付は記されていない．しかし，内容的には両者ともテムルの即位に言及している点では共通していることから，*U 9192 [T III M 182] の年代は U 4688 [T II S 63] とほぼ同時期であると考えられる．ただし，*U 9192 [T III M 182] にはバヤウト氏出身のブルガン=カトンの名が明記されていることから，*U 9192 [T III M 182] の方が若干年代が下る可能性も排除しない (**Text B**, 語注 2)．

これら二つの奥書の関係について，U 4688 [T II S 63] と *U 9192 [T III M 182] とを比較してみると，三つ折りにされた折本の一面当たりの行数の相違 (U 4688 [T II S 63] は 6 行，*U 9192 [T III M 182] は 5 行)，句読点の打ち方の相違 (*U 9192 [T III M 182] は 4 点の句読点によって頭韻四行詩の一節の終わりを表示するが，U 4688 [T II S 63] にはそれが見られない) や，字体の相違が見られる．一つの版本の中では普通，行数・句読点・字体は基本的に統一されるので，両者が元々同一版本に属していた可能性は低く，Sertkaya 氏も指摘

する通り[28]，別々の版に属していたと見なすのが自然であろう．第3章においても述べるように，私はU 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] がテムルの即位を記念して出版されたウイグル語印刷仏典の奥書であったと考えているが，テムルが即位した際に，数種類(少なくとも2種類以上)のウイグル語印刷仏典が刊行され，その中のある一つの仏典の奥書がU 4688[T II S 63]，それとは別の種類の仏典の奥書が*U 9192 [T III M 182] だったのではないかと推測する．

ところで，ウイグル語版本の年代については，かつてCarter氏が13世紀～14世紀初めに属するとの見解を表明して以来[29]，学界ではほぼ13～14世紀，つまりモンゴル時代に当たるとの見方が一般的となった[30]．そして，これを決定的にしたのが，Zieme氏の研究であった．Zieme氏は，ドイツ隊が持ち帰ったトゥルファン収集品に含まれるウイグル語印刷仏典の奥書で日付を持つもの9点を集め，それら全てを13～14世紀に年代比定した[31]．ウイグル語印刷仏典の奥書で使用される日付は，多くの場合，十二支と十干を組み合わせたものであるが，ここでは，ツィーメ＆百濟1985[32]により，百濟氏が発見した1点を含む10点を以下に列挙してみよう．

① 1248年：戊申の年6月8日，Buyančoγ Baxšï が中都の弘法寺で6種の経典を出版

② 1295年：既述 (Zieme論文では1296年となっている)

③ 1302年：壬寅の年7月に *Nāmasaṃgīti* を大都の白塔寺で出版

④ 1313年：癸丑の年6月1日にSïlïγ Tigin が『北斗七星延命経』を1000部出版

---

(28) Sertkaya 1989, p. 189.

(29) カーター(著)／藪内＆石橋(訳注) 1977, p. 45. ただし，Carter氏は，敦煌出土文献についてPelliot氏から様々な情報を得ていたので，Pelliot氏も同様の見解を持っていたと考えてよいであろう．

(30) 例えば，Gabain 1967, p. 17; Ligeti 1971, pp. 295-296.

(31) Zieme 1981.

(32) ツィーメ＆百濟 1985, pp. 30-31.

⑤1330年：庚午の年8月1日にŠarakiが観音菩薩に祈る仏教詩を1000部出版

⑥1333年：癸酉の年5月15日，普慶寺(Puking si)で*Avalokiteśvarasādhana*を出版

⑦1336年：丙子の年11月1日Böri Buqaが出版

⑧1347年：丁亥の年正月，Tangučaq Tuが出版

⑨1347年：丁亥の年，Bodi Ṭuvača Šilaが出版

⑩1361年：至正21年，丑年3月1日に，甘州で出版

さて，ここに示した10点のうち，②については既に私がZieme説を訂正し，③～⑩の年代比定ついては異論がないが，1248年とする①の年代だけは未だ議論の一致を見ていない．そこで私は，①の年代を確定することを試みたい．

①はU 4791 [TM 36]の文書番号を持つ印刷仏典の奥書であり，Buyančoγ Baxšiなる人物が，戊申の年に中都(Čungdu)の弘法寺(Xungvasi)において6種類の経典を出版させた経緯が記されている．これについてはZieme氏が解読したテキストが発表されている．(33)

奥書に見える「戊申の年」について，Zieme氏は初め，ウイグル語印刷仏典がモンゴル時代に属するとの前提に立ち，可能性としては1248・1308・1368年のいずれかが考えられるとしながらも，最終的には1248年と結論していた．というのも，Buyančoγの仏典が印刷された場所が中都の弘法寺であったことに鑑み，現在の北京が「中都」と呼ばれるのは金代及びクビライ時代の初めのみであり，大都が建設されてからは「中都」という呼称は現れなくなるから，1308年や1368年ではありえず，1248年と考えたのである．(34) これに対して森安氏は，上で挙げた9点の年代のうち8点(②～⑨)が13世紀末～14世紀に比定され

(33) Zieme 1995/96.

(34) Zieme 1992, p. 49.

るのに，唯一①だけが13世紀前半なのは不自然であるとして，①に対するZieme氏の年代比定に疑念を表明していた[35]．その後，Zieme氏は，森安氏の提案を受け入れ，1308年の可能性も排除できないとして，これまでの見解を修正した[36]．Zieme氏は，1308年説を採るとすれば，奥書に見えるČungduとは，金の首都であった中都（現在の北京）ではなく，1307年，武宗カイシャンが，即位と同時に大都と上都の中間の地点，つまり興和路のオングチャドゥ(mong. Ongγučadu）の地に造営を開始した新都「中都」を指すというのである．ただZieme氏は，オングチャドゥの中都についての情報が極めて乏しいことから，この考えが説得力に欠けることを自ら認めている．

これに対して，党氏は，この「戊申の年」を，1248年でも1308年でもなく，1188年に比定した[37]．また，『大元一統志』[38]の記事から，金代中都の城内には弘法寺という寺院の存在が確認されるから，Čungduは金の首都であった中都の方を指していると考えた．党氏は，Zieme氏が発表した版本断片MIK III 7624（Zieme 1995/96ではMIK III 23に誤っているので訂正．以下，同）に注目したが，これは，表面がBuyančoγとその両親が左端に小さく描かれている印刷仏典の扉絵で，裏面には漢訳『大般若波羅蜜多経』巻184が貼り付けられている．党氏によればこの『大般若波羅蜜多経』は金代の大宝集寺本と完全に一致するという．一方で，Buyančoγの奥書U 4791［TM 36］にはBuyančoγが6種類の仏典を出版させたことが述べられているが，その中の一つに『大般若経』が含まれているので，MIK III 7624の裏面の『大般若波羅蜜多経』はまさにBuyančoγが出版させた『大般若経』そのものに違いないとし，これを主な根拠にBuyančoγが仏典の出版を行ったのが金代であると考えたのである．つまり党氏は，Buyančoγがウイグル語仏典を出版させたとするZieme・森安説に従わず，漢語の仏典を

(35) 森安 1983, p. 230, n. 23.
(36) Zieme 1992, p. 49, n. 240b; Zieme 1995/96, pp. 413-414.
(37) 党 1999.
(38) 中華書局標点本, p. 27.

出版させたと考えているのである.[39] しかし Zieme 氏は,『大般若波羅蜜多経』が版本ではなく手写されたもの (handwritten passage) と言っているし,[40] 私も現物を見ていないので, Buyančoγ が出版させたのが漢語の仏典であったのかどうか現段階では判断しないでおく. 更に党氏は,「戊申の年」が 1248 年・1308 年のいずれにおいても成立しないことを, いくつかの根拠を挙げて論証しようとしているが, Buyančoγ の仏典が 1308 年にカイシャンが建造した中都において出版されたとする先の Zieme 氏の考えについては, 1307 年に建設が開始された中都において, 大蔵経を出版しうるような寺院がこれほど短期間に建設できる可能性は低いとし, Zieme 説を退けた.

確かに, 党氏が指摘する通り, 奥書に見える Čungdu をカイシャンが建設したオングチャドゥの新都に比定する Zieme 説には無理があろう. やはり, Čungdu とは金の首都であった中都, 即ち現在の北京に大都が建設された後も, それに隣接して残っていた旧城の方を指していると考えるべきである.

ただし, そうであるとしても, 私は党氏の 1188 年説には従うことはできない. 仮に党氏の言うように, MIK III 7624 裏面に貼り付けられた『大般若波羅蜜多経』が金代の大蔵経の版木から印刷されたものだったとしても, 元代の弘法寺には金代の大蔵経の版木は残っており, その版木を使って仏典が印刷されることもあったのである. 事実, クビライ時代に弘法寺で大蔵経が出版された時には, 弘法寺に保存されていた金代の版木が利用された.[41] 従って, MIK III 7624 の裏面の『大般若波羅蜜多経』が金代のものと一致するからといって, ただちにこれが金代に印刷されたと考えることはできないのである. 更に党氏の説に不利な材料がある. それは, Buyančoγ 親子が描かれている MIK III 7624 の表面の扉絵の構図が金代の広勝寺本や大宝集寺本とは異なっていることで,

---

(39) Zieme 氏は, 1990 年に発表した論文では, Buyančoγ の出版させた仏典が漢語であったのか古代テュルク語であったのか分からないと言っていた. Cf. Zieme 1990, p. 38.

(40) Zieme 1995/96, p. 410.

(41) 小川 1956, p. 34; 竺沙 1998, pp. 7-12.

これは党氏自ら認めている.[42] そうなるとMIK III 7624の裏面に貼られた『大般若経』はともかく，MIK III 7624そのものが金代に出版されたと考える根拠はなくなるのではなかろうか．私はむしろ，Buyančoγをモンゴル～元代の人と考え，彼がモンゴル時代に仏典を出版させた時に，金代の版木を転用したと考える．いわゆる「色目人」が中国内地に入り，漢語だけでなくウイグル語・モンゴル語・西夏語・チベット語の印刷仏典を大々的に出版し始めるようになるのはモンゴル時代，それも14世紀に入ってからであることを考えれば,[43] Buyančoγが仏典の出版の施主となるのはモンゴル時代，特に14世紀こそが歴史学的に見て相応しく，決して金代とは考えられない．党氏はBuyančoγが金代に中都に来ていたウイグル商人であったと言うが,[44] それもあくまで推測に過ぎず，何の根拠もない．党氏の考えは誤りであろう．

以上，1188年説が成立しないことを論じたが，1248年説も党氏の言うように成立しないとすれば，この問題をいかに解決すべきか．結論から言えば，私は「戊申の年」を1308年に，Čungduを金の首都であった中都に比定する．ただ，『元史』を始めとする漢文史料では，大都が完成して以降，金の首都であった中都の都城は常に「南城」や「旧城」と呼ばれ，「中都」とは呼ばれなくなる.[45] 従って，1308年説が成立するためには，大都が完成してからも依然として金の中都の都城が「中都」と呼ばれていたことを証明する必要があるのである．

---

(42) 党 1999, p. 112.

(43) 例えば，1315年，白蓮教の嗣教陳覚琳が「毘盧大蔵経」を出版したが，この時，クビライに仕え，ジャワ遠征に参加したことで知られるウイグル出身のイグミシュ（uig. Ïγmïš）が「都大勧縁栄禄大夫呉国公亦黒迷失」として，この出版事業の監督者となっている．イグミシュ自身も相当の額の経済的援助を行ったに違いない．また，14世紀前半，管主八なる人物が，江南において，国家事業として大規模な漢語・西夏語・チベット語大蔵経の出版事業を行っていた事実もある．この人物もその名から判断する限り非漢人であることは疑いない．Cf. 常盤 1939; 小川 1943; 小川 1956, p. 35; 北村 1981.

(44) 党 1999, p. 112.

(45) 渡辺 1999.

実は，14 世紀になっても金の中都の都城が依然として「中都」と呼ばれていたことを裏付ける史料が，ラシード『集史』に存在する．該当箇所を Boyle 氏の英訳によって引用してみよう．[46]

> He established his summer residence in the town of Khan-Balïq, which in Khitayan is called **Jungdu** and which had been one of the capitals of the rulers of Khitai.

この史料はクビライが「カンバリク」に夏営地を置いたことを述べているものである．ここでラシードの言う Jungdu が金の中都を指していることは問題ない．ところで，ラシード『集史』の中では，カンバリク (türk. Qan Balïq) とは常に中都の都城のみを指し，一方で，新たに造営された大都は Dāidū と呼ばれ，両者は明らかに区別されている．[47] ラシードが『集史』を完成させたのは 1310 ～ 1311 年であり，そこには大元ウルスからやって来た Pūlād なる人物から得た情報も含まれている．カンバリクが漢人の間では中都と呼ばれているというラシードの記録は，14 世紀初め，まさにラシードと同時代の大元ウルスの状況を反映したものであると見て間違いあるまい．従って，旧中都の都城は，14 世紀に入り，漢文の公式の記録には「南城」や「旧城」と呼ばれるようになっても，一般的には依然として中都とも呼ばれていたことがこれで証明されるのである．

---

(46) Boyle 1971, p. 274.

(47) 宇野 & 村岡 & 松田 1999, pp. 19-20, n. 9.

以上より私は，U 4791 [TM 36] の「戊申の年」を 1308 年に，Čungdu を金の首都であった中都の都城に，それぞれ比定したい[48]．これで，ウイグル語印刷仏典の奥書で現段階で年代が判明するもので，13 世紀前半に遡るものは一点もなくなったことになる．従って，我々は，従来 13 ～ 14 世紀とやや広く考えられていたウイグル語印刷仏典の年代をより限定して，13 世紀後半～ 14 世紀中葉（大元ウルス滅亡まで）とすることができるであろう．

(2) U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] の出版地

次に U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] の出版地について検討してみよう．ウイグル語印刷仏典の出版地については，現在，大都地区を中心とした中国内地と考えるのが一般的な見方となっている．先に紹介した奥書 10 点のうち，③ は奥書に「大都にある白い塔を持つ大寺院において」出版がなされたとある．「白い塔を持つ大寺院」とはクビライが大都に建立した，チベット式の白いストゥーパを持つ勅建寺院，大聖寿万安寺（現在の北京の妙応寺）に他ならない[49]．更に，⑥ の奥書に見える Puking si について，Zieme・百濟両氏は，14 世紀初めにテムルが大都に建立した勅建寺院，大承華普慶寺に比定した[50]．また，本稿の注 48 でも紹介した U 4217 [T II T 623] は中都で印刷されたとあり，

---

(48) U 4791 [TM 36] 以外にもう一点，中都で出版されたことを記す頭韻四行詩で書かれたウイグル語印刷仏典の奥書 U 4217 [T II T 623] がある [*BTT* XIII, No.54, p. 182]．

yrlïqančučï kǫngül-lüg qan-ïmz :	慈悲心を持つ我らがカンが，
yapa-qa asïγ qïlγu üčün :	全ての人々に利益をなすために，
yrlïγ üzä čungdu-ta :	勅命によって，中都において
yangïrḍï tamγa-qa oyḍurdï	新たに印版に彫らせた．

これまで論じて来たことを踏まえれば，ここで言及されている中都もやはり，オングチャドゥではなく金の首都であった中都の方を指し，出版された年代は 13 世紀後半～ 14 世紀中葉であった可能性が高い．

(49) ツィーメ & 百濟 1985, p. 30.

(50) ツィーメ & 百濟 1985, p. 31. 大承華普慶寺は，成宗テムルによって建設が開始された勅建寺院であり，1308 年に完成している．Cf. 中村（淳）1999, p. 65.

これは金の首都であった旧中都城を指している可能性が高い．小田氏は，文宗トクテムルの側近で雲南遠征に送られる Yol Tämür の無事を，その妻 Šaraki が観音菩薩に祈った仏教詩(⑤)が大都において印刷されたものと推測している．[51] Franke 氏は，クビライの臣僚の一人であったウイグル出身のムンスズ (uig. Mungsuz 孟速思) とその一族が描かれた仏典の扉絵は，大都で印刷され，これがトゥルファン盆地に送られたものと推測したし，[52] 百濟氏は，現在天理図書館に所蔵されている敦煌出土ウイグル語文書の中に含まれる印刷仏典がやはり中国内地 (特に大都) から敦煌に送られたものと考えた．[53]

ウイグル語印刷仏典が出版されたのは大都地区だけではない．小川氏は，『吐魯番考古記』に掲載されているウイグル語訳『天地八陽神呪経』の扉絵(図版 106・107)に記されている陳寧という刻工が，14 世紀に江南の平江路で出版された磧砂延聖寺版の漢語の大蔵経の扉絵に見える刻工の名と同じであることから，これが杭州で印刷されたと結論した．[54] つまり，現存しているウイグル語印刷仏典の中で出版地が判明するものは，ただ一点，1361 年に甘州で印刷されたことを示す奥書(⑩)[55]を除いて，全てが中国内地，それもほとんどが大都地区なのである．このように，中国内地で大量に出版された印刷仏典が，特に 14 世紀前半に河西地方やトゥルファン盆地に送られていたのである．

更に，トゥルファン出土のモンゴル語印刷仏典の中で唯一奥書を持つ Čosgi Odsir 著『*Bodhicaryāvatāra* の注釈』には，これが 1312 年に大都の大聖寿万安寺で出版されたことが明記されている．[56] Čosgi Odsir が頭韻四行詩に作詩した『Mahākālī 賛歌』[57]も同様に大都で出版されたと考えてよかろう．次稿において

---

(51) 小田 1980, p. 17.
(52) Franke 1978a, p. 39.
(53) 百濟 1986, pp. 133-132. (逆頁)
(54) 小川 1956, p. 35; ツィーメ & 百濟 1985, p. 32; 小田 1987, pp. 28-29.
(55) 百濟 1984, p. 81; ツィーメ & 百濟 1985, pp. 31-32.
(56) Cleaves 1954, pp. 55, 86, pp. 128-129, n. 347; Cerensodnom & Taube 1993, p. 21.
(57) Franke 1981; Cerensodnom & Taube 1993, pp. 114-120.

も述べるが，14 世紀になって，モンゴル語仏典はウイグル語仏典の強い影響の下，大都地区を中心とする中国内地において作られ始めたことをも考え合わせれば，トゥルファン盆地から出土したモンゴル語印刷仏典もそのほとんどが大都を中心とする中国内地で出版され，トゥルファン盆地に送られたものと考えて大過ないであろう．Rachewiltz 氏も指摘するように，元代において出版の一大中心地は大都であった．[58] 以上を踏まえれば，U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] の出版地が大都であろうことは容易に推測できる．

第 3 章　ウイグル語印刷仏典出版に対する大元ウルス政府の関与

第 1 章のテキスト・語注において見たように，U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] は，テムルを褒め讃える修飾語句をことさらに多用していた．Zieme 氏が「形容詞句の頻発 (Häufung von Epitheta)」と呼んだ[59]のも頷ける．またテムルがチンギス以降歴代の大カアンの後を承けた正統な大カアンであることを謳い，更には転輪聖王にも擬(なぞら)えていた．ウイグル語印刷仏典の奥書の中でこのような形式を持つものは他には見当たらず，非常に特異な内容を持っていると言ってよい．

ここで，元代の出版文化に対する新しい見方を提示した宮氏の最近の研究[60]に注目したい．宮氏は，「モンゴルが漢文化を冷遇したため，漢人官僚たちはそのはけ口として庶民文化に力を注いだ」とする従来の見方が誤りで，実際は「庶民文化」と言われるものが実は大元ウルス政府主導の下に作られていたことを明らかにしつつあるが，その中で，14 世紀以降，大カアンや皇太子などの即位時に大規模な出版事業を行うのが慣例となっていたことを明らかにした．即ち，大徳 11 (1307) 年 5 月にカイシャンが即位すると，その翌月，皇太子となった

(58)　Rachewiltz 1982, p. 17.
(59)　Zieme 1992, p. 74.
(60)　宮 2006 はこれまでの宮氏の研究を集大成したものである．

アユルバルワダの命で『大学衍義』がモンゴル語に翻訳され，絵解き本の『孝経』・『列女伝』とともに出版された．更に同年 8 月，カイシャンはパクパ文字モンゴル語訳『孝経』の刊行を中書省に命じた．これらはカイシャンの即位，アユルバルワダの立皇太子を記念して，カイシャン・アユルバルワダ・ダギの三者の協力によって行われた出版事業であったという．[61] また，シディバラが即位した延祐 7 (1320) 年の 12 月にはウイグル出身のクトルグトゥルミシュ *Qutluγ Turmīš がモンゴル語訳した『大学衍義』が頒布されている．至治元年刊の鄭鎮孫『直説通略』も，シディバラ即位を記念して出版されたものだという．[62] これらの事実を踏まえれば，U 4688 [T II S 63] の 17 ～ 18 行目に「テムル=カアンは，神聖なセチェン=カアンの位に就き，第 2 ‥」とあるし，*U 9192 [T III M 182] の 1 行目にも「(テムルが) 位にお就きになった」とあり，両者ともテムルの即位に言及していたことを考慮すると，これらの奥書を持つウイグル語仏典がテムルの即位を記念して出版されたと考えられないだろうか．

実は，モンゴル時代の仏教文献にも即位記念出版物と考えられるものが存在するのである．私が現時点で把握している限りでは，アユルバルワダの即位を記念して出版されたと考えられるモンゴル語印刷仏典『*Bodhicaryāvatāra* の注釈』[63] と，トクテムルの后で，コンギラト氏出身のブダシリ (ト答失里 *Budaširi < skt. Buddhaśrī) が太皇太后に立てられたことを記念して出版された漢訳大蔵経，いわゆる「元官蔵」である．[64] また松川氏は，天暦元 (1328) 年，文宗トクテムルが即位した際，その側近であったウルクブケ Ürüg Bökä なる人物が施

(61) 宮 1998, pp. 25-32.

(62) 宮 1999, pp. 63-64.

(63) モンゴル語では *Bodistw-a Čari-a Awatar-un Tayilbur* と表記される．Haenisch 1954; Cleaves 1954; Cerensodnom & Taube 1993, No. 10-21, pp. 75-95.

(64) 小野 1930; 童 & 方 & 金 1984.「元官蔵」とは，童・方・金の三氏がこの大蔵経を呼んだ呼称で，私もこれに従っておいた．

主となってモンゴル語・ウイグル語訳『北斗七星延命経』の出版事業が行われた可能性が高いと指摘していた.[65]

モンゴル語印刷仏典『*Bodhicaryāvatāra* の注釈』ついては，1954 年に Haenisch 氏と Cleaves 氏がそれぞれ学界に紹介し，トゥルファン収集品のモンゴル語印刷仏典で唯一奥書を持っていたことで早くから注目されていた．そこからこの仏典の出版の経緯をある程度知ることができる．即ち，アユルバルワダが即位して四ヶ月後のブタ (1311) 年 7 月，Čosgi Odsir なる人物がこの仏典を書き終えた．それから九ヶ月後の皇慶元 (1312) 年 4 月に，大都の大聖寿万安寺 (白塔寺) において 1000 部が刊行された．この出版事業がアユルバルワダの即位後間もない時期に，アユルバルワダ自らの命令によって開始されたという事実，また，至元 9(1273) 年にクビライによって建立された勅建寺院，大聖寿万安寺で印刷されたという事実より，『*Bodhicaryāvatāra* の注釈』が即位記念出版物であった可能性は極めて高い．

ここで，アユルバルワダの下でモンゴル語仏典が，しかも 1000 部という，当時としては膨大な部数が出版された事実に注意を喚起しておきたい．アユルバルワダ時代の延祐 5(1318) 年，『大学衍義』が国家刊行物として出版・頒布されたことがあったが，この時，50 部が臣下に下賜されたに過ぎなかった.[66] 従来，アユルバルワダが漢人官僚を抜擢し，儒教文化政策を大々的に行ってきたことが強調されてきたが，杉山正明氏が言うように，アユルバルワダは「モンゴル語に抄訳された漢文典籍の「さわり」を朗読させてよろこんでいた」に過ぎず，儒学尊重も「成宗テムル以来の既定の路線を踏襲しただけ」であった．実はアユルバルワダ政権の主要な宰相はその他の時期と変わりなく，

---

(65) ここで掲げられたモンゴル語・チベット語の奥書はいずれも 17 ～ 18 世紀のもので，記述にも若干混乱が見られることから，史料の信憑性についてはやや疑問が残る．Cf. 松川 1992, pp. 125-141.

(66) 『元史』巻 18, 仁宗本紀，延祐 5 年 9 月己卯条：「己卯，以行浙省所印大学衍義五十部賜朝臣」(p. 586).

モンゴル・ウイグル・ムスリムで固められていたのである.[67] アユルバルワダ政権にとって，儒教経典よりも仏典の出版の方が遥かに重要だったに違いない.

続いて「元官蔵」についても検討を加えたい．これについては，かつて小野玄妙氏が紹介した後至元2(1336)年の日付を持つ奥書部分のみが知られていた.[68] しかし，1979年に雲南図書館から同じ奥書を持つ経典32巻が発見され，1984年に詳しい報告が出された.[69] 奥書については小野・方・Franke氏の研究があるが,[70] これらの研究に拠りつつ，奥書を紹介した上で私なりの歴史的位置付けを与えてみよう．奥書には先ず願文が記され，その後に銓経・対経に当たった仏僧，収支その他を担当した役人，政府関係者の総勢54名とその肩書きが記載されている．願文から分かる通り，この大蔵経は，「賛天開聖仁寿徽徳宣昭貞文慈祐儲善衍慶福元太皇太后」，つまりブダシリの発願によって出版されたものである．小野氏は，『元史』巻38，順帝本紀，後至元元(1335)年12月乙丑の条にある「奉玉冊玉宝上太皇太后，尊号曰賛天開聖仁寿徽徳宣昭貞文慈祐儲善衍慶福元太皇太后」(p. 830)という記事を引用し，この出来事と大蔵経出版事業との間に何らかの関連があるものと推測したに止まったが,[71] 私はそれを一歩進めて，「元官蔵」がブダシリが太皇太后に立てられたことを記念して出版されたものと考えたい.

ところでここで注意すべきことは，ここにその名が挙げられている政府関係者のほとんどが徽政院関連の肩書きを持っており，更には当時の大元ウルス政府の最高権力者であったメルキト部出身のバヤン(伯顔 *Bayan)や，撒廸・伯撒里(*Bäg Salï?)・常不蘭奚ら大元ウルス政府高官の名までが記されていることである.[72] 徽政院とは，元々皇太子チンキムに直属していた詹事院がその前身で，チンキ

(67) 杉山 1995, p. 120.
(68) 小野 1930.
(69) 童 & 方 & 金 1984.
(70) 小野 1930; 方 1988; Franke 1997.
(71) 小野 1930, p. 9.
(72) 小野 1930, pp. 8-9; 方 1988, pp. 247-250; Franke 1997; 竺沙 1998, pp. 14-15.

ムの所領地を管理する機構であった．しかし，チンキムが死去し，テムルが即位すると詹事院は徽政院に改められ，チンキムの后でテムルの母，コンギラト氏出身のココジン=カトン直属の機構となったのである．これ以降，徽政院は複雑な沿革を示しながらも，一貫してその利権はコンギラト氏出身の皇后・皇太后によって独占されるのである．(73) つまり「元官蔵」の奥書に記されている徽政院関係者は全てコンギラト氏のブダシリの支配下にあった臣僚であることになる．また，バヤンを始めとして撒廸・伯撒里・常不蘭奚らの政府高官はいずれもブダシリの側近である．つまり，「元官蔵」出版の実情は，ブダシリが太皇太后に立てられたことを記念して，「コンギラト派」，即ちブダシリを頂点として，バヤンら政府高官及び徽政院関係者全体によって行われた一大出版事業だったのである．

以上の事例をも踏まえ，私は，U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] がテムルの即位を記念して出版されたウイグル語仏典の奥書であったと結論付けたい．そうだとすれば，これらのウイグル語仏典はいかなる歴史的背景の下で出版されたのであろうか．ここで，クビライ～テムル期の政治史に若干触れ，U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] 出版の背景を明らかにしたい．

テムルが大カアンに即位する前後の時期，大元ウルス北辺では大元ウルス軍とカイドゥ・ドゥア軍との激しい戦闘が繰り広げられていた最中であった．至元 29 (1292) 年，カイドゥ・ドゥア軍に対抗するべく北辺の大元ウルス軍の統一指揮体制が作られると，クビライは，かつて枢密院の長官として大元ウルスの軍政全般を管轄していたチンキムの「皇太子の璽」をテムルに与えた上で，最高司令官として北辺に派遣した．(74) 至元 31 (1294) 年正月，クビライが死去すると，同年 4 月，テムルは，チンキムの后ココジン=カトンが監国として上都で開催したクリルタイで大カアンに推戴される．この時，テムルの実兄である

(73) 以上の過程は方氏の論考に詳しいのでここでは簡略に述べるに止める．また，岡田氏も示唆に富んだ発言を行っている．Cf. 岡田 1985, pp. 169-172; 方 1988.

(74) 松田 1982, pp. 79-80.

晋王カマラも皇位継承権を持っていたが，テムルは，北辺の大元ウルス軍を最高司令官として率いており，その軍事力はカマラを圧倒していた．テムルはその軍事力を背景に即位したのである．そしてテムル政権が発足するが，その実権はテムルの実母ココジン=カトンが握っていた．ココジン=カトンはチンキムのケシク長であったオルジェイ Ölǰei を中心に，チンキムのケシクにあった者を中心に政府を構成したのである．(75)

それでは，U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] の出版事業の主体はどこか．疑いなく，長い間北辺に留まり，首都圏での政情に疎かったと思われるテムル自身の発案であったとは考えられない．そうだとすると，テムル即位記念のウイグル語仏典を出版させた主体は，テムル政権の実権を握ったココジン=カトンを中心として，チンキムのケシクにあったコンギラト派の政治集団であったということになるのではないだろうか．訳注においても指摘したように，U 4688[T II S 63]の 10 行目に，恐らくは皇太后ココジン=カトンの意向で，チンギスやクビライと同列にチンキムの名があえて記されているのも一証となろう (**Text A**, 語注 10)．以上より私は，U 4688 [T II S 63]・*U 9192 [T III M 182] はテムルの即位を記念して，ココジン=カトンを中心とする政府関係者が主体となって出版したウイグル語印刷仏典の奥書であったと考える．

ところで，最近の研究で明らかになっているように，クビライは「新国家建設政策」の一環として帝師パクパを利用し，新国家・新帝王出現の雰囲気を演出し，自身の王権の権威付けを行っていた．例えば，大都の大明殿の御座上には白傘蓋が置かれたが，毎年 2 月 8 日から一週間，この白傘蓋が輿に載せられ大都城内を一周する「白傘蓋の仏事」が 1270 年から開催された．この仏事は『白傘蓋陀羅尼』を典拠とし，あらゆる災難から国家を守るという意味が込められていた．また，クビライは大都に大聖寿万安寺などのチベット式寺院を建立し，

(75) 片山 1983, pp. 47-60; 杉山 1995, pp. 100-102.

大都をチベット密教独自の雰囲気に包み込んだ．更にパクパは，クビライを転輪聖王に擬え，王権の権威付けを図った．大都宮城の正門，崇天門には金輪が掲げられたが，これは仏教世界の帝王の最高位，金転輪聖王を意味していた．[76] 以上に加え，クビライは，大元ウルス成立前後の時期，ウイグル出身の臣僚を招集してチベット語を学ばせ，国家事業としてサンスクリット・チベット語の仏典やパクパの著作をウイグル語と漢語に翻訳させ，これを出版させるという一大事業を行っていた．[77]

一方，テムルもクビライとパクパの政策を継承し，クビライにも仕えたチベット仏僧タクパオーセル Grags-pa 'od-zer を帝師として迎え，[78] 大都に勅建寺院である大承華普慶寺の建立を開始した．[79] 更に，訳注において見たように，U 4688[T II S 63]・*U 9192[T III M 182]はテムルを転輪聖王に擬えていたが，これは明らかにクビライの影響である．テムル政権もクビライに倣い，チベット仏教を利用した諸事業を行うことで，テムルの王権の権威付けを図るとともに，国家を仏教的雰囲気の中に包む効果を期待したのである．1295 年，つまりテムル即位の翌年に行われたウイグル語仏典の出版事業は，まさにこれらの諸事業の一環だったのではなかろうか．恐らくは大都で出版されたこの仏典が，遠くトゥルファン盆地まで運ばれた事実は極めて興味深い．

宮氏は即位時の記念事業が「武宗カイシャンいらいほとんど習慣化した」ものと指摘したが，[80] 仏典出版の側から見れば，実はクビライが大元ウルス建設に際して新国家・新帝王出現の雰囲気を演出し，自身の王権の権威付けを行う意図で行ったウイグル語・漢語の仏典の出版事業が端緒となり，テムル及びそれ以降の歴代大カアンや皇族も即位時に仏典出版事業を行っていた可能性が高い．

---

(76) Franke 1978b; 中村（淳）1993; 石濱 1994; 中村（淳）1997, pp. 130-137.
(77) この点については次稿において述べる．
(78) 野上 & 稲葉 1958, p. 438.
(79) 中村（淳）1999, p. 65.
(80) 宮 1999, p. 63.

テムル以降の大カアン及びその政権においても，仏教関連の即位記念事業が行われた事例をいくつか挙げることができる．先述したように，アユルバルワダは皇慶元（1312）年にモンゴル語『*Bodhicaryāvatāra* の注釈』を出版させ，シディバラは延祐 7（1320）年 11 月に各郡に「帝師パクパ殿」を建立させた．[81] イスンテムルは泰定元（1324）年 8 月，パクパの肖像を各行省に頒布させた．[82] 後至元 2（1336）年に，ブダシリが太皇太后に立てられたことを記念して漢訳大蔵経の出版が行われたのも先に指摘した通りである．これらの政策は皆，即位の雰囲気を盛り上げるための仏教的演出であったのだろう．

おわりに

モンゴル時代，特に 14 世紀に入ると，チベット語・サンスクリット語を原典とする仏典が盛んにウイグル語やモンゴル語に[83]翻訳され，政府主導で大々的に出版され，ウイグリスタンにもたらされた．これらの仏典出版の背景については，歴代大カアンがクビライの政策を継承して，チベット仏教を大カアンの王権強化の手段として用いる一方，チベット語やサンスクリット語を原典とする仏典をウイグル語やモンゴル語に翻訳させ，それらを出版することで国内を仏教的雰囲気の中に包み込む効果を狙っていた事実と関連付けることができるであろう．事実，ウイグル語印刷仏典『普賢行願賛』の奥書 U 4766［TM 19］＋ U 4821 には，

---

(81) 『元史』巻 27, 英宗本紀，延祐 7 年 11 月丁酉条：「丁酉，詔各郡建帝師八思巴殿，其制視孔子廟有加」（p. 607）．宮氏もこれがイスンテムルの即位記念事業だと認めている．Cf. 宮 1999, p. 63. また，『仏祖歴代通載』巻 22「勅建帝師殿碑」はこの事業について詳述している．

(82) 『元史』巻 29, 泰定帝本紀，泰定元年 8 月辛未条：「辛未，繪帝師八思巴像十一頒各行省，俾塑祀之」（p. 650）．

(83) この時期に翻訳されたモンゴル語仏典が，サンスクリット語やチベット語，漢語から直接翻訳されたのか，あるいは一旦ウイグル語に翻訳されてから更にモンゴル語に重訳されたのかという問題については現段階では明らかになっていない．今後取り組むべき課題である．松川氏は，モンゴル語訳『北斗七星延命経』がウイグル語から翻訳された可能性が高いと指摘している．Cf. 松川 2004.

これが qaγan qan yrlïγ-ï üzä「カアン=カン（大カアン）の仰せによって」出版されたことを示す記述があるし，[84] Krotkov 氏のコレクションに含まれる *Rājāvavādaka* の奥書には，この経典が大カアンの命令によって，サンガシリ（Sangga Širi < *Saṃghaśrī）なる人物がチベット語からウイグル語に翻訳したことが明記されている．[85] また，これ以外にも，ウイグル語印刷仏典の奥書には，大カアンを始めとするモンゴル皇族に対する功徳回向文を持つものが相当数存在する．[86]

ウイグル語印刷仏典の奥書には出版の具体的な経緯が記されることは極めて稀であるが，我々は，出版の主体としてモンゴル皇族や，大元ウルス政府関係者を背後に想定しなければならないであろう．最近の研究で明らかにされてきているように，大元ウルスは出版事業に極めて高い関心を持ち，14 世紀始めには一大出版ブームを迎える．あらゆるジャンルの出版物が刊行され，挿絵や図解入りのものさえも現れる．[87] ウイグル語やモンゴル語仏典が元代，特に 14 世紀に入ると政府主導で大量に出版され，これがウイグリスタンにもたらされた背景も，モンゴル時代史のこのような動きとリンクさせて理解できるのではなかろうか．

擱筆するにあたり，今後の課題を挙げておきたい．クビライの大元ウルス建設の際，あるいはテムル即位の際に行われた出版事業において，何故ウイグル語で書かれた仏典が出版されたのであろうか．換言すれば，モンゴルにとってウイグル語・ウイグル語仏典とはいかなる意味を持ったのか．この問題についてはウイグル仏教文化がモンゴルに与えた影響とも絡めて，次稿において論じたい．

---

(84) Zieme 1982.

(85) Radloff 1911, pp. 72, 74.

(86) Zieme 1992, pp. 73-74.

(87) 宮 2001, p. 71．ちなみに，ウイグル語印刷仏典にも挿絵入りのものが存在する．Zieme 氏が *BTT* XIII の Text 1 として紹介した頭韻四行詩形式の Jātaka に見られる挿絵は，元刊本において一般的に見られる「上図下文形式」と酷似している．最近の研究で，宋版以前には見られなかった挿絵入りの出版物（いわゆる「全相本」）が，元代の中～後期から一挙に現れるようになったことが明らかにされている．杉山 2002, pp. 148-149.

文献目録

赤沼　智善

1931『印度仏教固有名詞辞典』名古屋，破塵閣書房.

石濱　裕美子

1994「パクパの仏教思想に基づくフビライの王権像について」『日本西蔵学界会報』40, pp. 35-44.

植松　正

1968「元代江南の豪民朱清・張瑄について——その誅殺と財産官没をめぐって——」『東洋史研究』27-3, pp. 46-71.

宇野　伸浩　&　村岡　倫　&　松田　孝一

1999「元朝後期カラコルム城市ハーンカー建設記念ペルシア語碑文の研究」『内陸アジア言語の研究』14, pp. 1-64, +5pls.

王　啓龍

1999『八思巴生平与《彰所知論》対勘研究』(中国社会科学博士論文文庫) 北京，中国社会科学出版社.

岡田　英弘

1985「元朝秘史の成立」『東洋学報』66-1/2/3/4, pp. 157-177.

小川　貫弐

1943「元代白蓮教の刻蔵事業」『支那仏教史学』7-1, pp. 4-14.

1956「吐魯番出土の印刷仏典」『インド学仏教学研究』4-1, pp. 28-37.

小田　壽典

1980「1330年の雲南遠征余談」『内陸アジア史研究』1, pp. 11-24.

1987「龍谷大学図書館所蔵ウイグル文八陽経の版本断片」『豊橋短期大学研究紀要』4, pp. 57-86.

小野　玄妙

1930「元代松江府僧録管主八大師の刻蔵事蹟」『仏典研究』2-13, pp. 1-10.

T. F. カーター (著) ／L.C. グドリッチ (改訂) ／薮内　清 & 石橋　正子 (訳注)

1977『中国の印刷術 2 その発明と西伝』(東洋文庫 316) 東京，平凡社.

片山　共夫

1983「アーマッド暗殺事件をめぐって——元朝フビライ期の政治史——」『九州大学東洋史論集』11, pp. 27-63.

北村　高

1981「元朝色目人『亦黒迷失』の仏教活動」『木村武夫教授古稀記念・僧伝の研究』京都，永田文昌堂，pp. 253-274.

百濟　康義

1984「ウイグル訳『阿毘達磨俱舎論』初探——藤井有鄰館所蔵断片——」『龍谷大学論集』425, pp. 65-90.

1986「天理図書館蔵　ウイグル語文献」『ビブリア』86, pp. 180-128 +4pls. (逆頁)

百濟　康義　&　小田　壽典
1983「ウイグル訳八十華厳残簡——付．安蔵と四十華厳——」井ノ口泰淳（主任）「指定研究：西域出土仏典の研究」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』22, pp. 176-205.
耿　世民　&　張　宝璽
1986「元回鶻文《重修文殊寺碑》初釈」『考古学報』1986-2, pp. 253-264.
庄垣内　正弘
1991-1993『古代ウイグル文阿毘達磨倶舎論実義疏の研究』1-3, 京都，松香堂.
杉山　正明
1987「西暦 1314 年前後大元ウルス西境をめぐる小札記」『西南アジア研究』27, pp. 24-56.
1989「元代蒙漢合璧命令文の研究（一）」『内陸アジア言語の研究』5, pp. 1-31 +2pls.
1995「大元ウルスの三大王国——カイシャンの奪権とその前後——（上）」『京都大学文学部研究紀要』34, pp. 92-150.
1996『モンゴル帝国の興亡（上）』（講談社現代新書 1306）東京，講談社.
2002『逆説のユーラシア史——モンゴルからのまなざし——』東京, 日本経済新聞社.
竺沙　雅章
1998「元版大蔵経概説」奈良県教育委員会事務局文化財保存課（編）『西大寺所蔵元版一切経調査報告書』奈良，奈良県教育委員会，pp. 7-20.
ペーター・ツィーメ　&　百濟　康義
1985『ウイグル語の観無量寿経』京都，永田文昌堂.
党　寶海
1999「吐魯番出土金蔵考——兼論一組吐魯番出土仏経残片的年代——」『敦煌吐魯番研究』4, pp. 103-125.
童　瑋　&　方　広錩　&　金　志良
1984「元代官刻大蔵経発現」『文物』1984-12, pp. 82-86.
常盤　大定
1939「西夏文字大蔵経の彫刊について」『東方学報（東京）』9, pp. 1-32 +7pls.
中村　淳
1993「元代法旨に見える歴代帝師の居所——大都の花園大寺と大護国仁王寺——」『待兼山論叢（史学篇）』27, pp. 57-82.
1997「チベットとモンゴルの邂逅——遥かなる後世へのめばえ——」『岩波講座 世界歴史 11　中央ユーラシアの統合』東京，岩波書店，pp. 121-146.
1999「元代大都の敕建寺院をめぐって」『東洋史研究』58-1, pp. 63-83.
中村　淳　&　松川　節
1993「新発現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 1-92 +8pls.
中村　元
1981『仏教語大辞典』東京，東京書籍.
野上　俊静　&　稲葉　正就
1958「元の帝師について」『石濱先生古稀記念東洋学論叢』大阪，関西大学文学部東洋史研究室石濱先生古稀記念会, pp. 430-448.

方　広錩
1988「元史考証両篇」『文史』29, pp. 229-253.
松川　節
1992「モンゴル文『仏説北斗七星延命経』の研究——元朝期モンゴル仏典訳経史の一側面——」(平成 3 年度大阪大学大学院修士論文).
2004「モンゴル語訳『佛説北斗七星延命經』に残存するウイグル的要素」森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』京都，朋友書店, pp. 85-92. [English version: Some Uighur Elements Surviving in the Mongolian Buddhist *Sūtra of the Great Bear*. Desmond Durkin-Meisterernst (etc. eds.), *Turfan Revisited: The first Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*. Berlin, 2004, pp. 203-207]
松田　孝一
1982「カイシャンの西北モンゴリア出鎮」『東方学』64, pp. 73-87.
宮　紀子
1998「『孝経直解』の出版とその時代」『中国文学報』56, pp. 20-57.
1999「鄭鎮孫と『直説通略』(上)」『中国文学報』58, pp. 46-74.
2001「程復心『四書章図』出版始末攷——大元ウルス治下における江南文人の保挙——」『内陸アジア言語の研究』16, pp. 71-122.
2006『モンゴル時代の出版文化』名古屋，名古屋大学出版会.
村上　正二
1970『モンゴル秘史 1 チンギス・カン物語』(東洋文庫 163) 東京，平凡社.
森安　孝夫
1983「元代ウィグル仏教徒の一書簡——敦煌出土ウィグル語文献補遺——」護雅夫(編)『内陸アジア・西アジアの社会と文化』東京，山川出版社, pp. 209-231.
渡辺　健哉
1999「元代の大都南城について」『集刊東洋学』82, pp. 103-121.
Boyle, J.A.
1956 On the Titles given in J̌uvainī to Certain Mongolian Princes. *HJAS* 19, pp. 146-154.
1971 *The Successors of Genghis Khan translated from the Persian of Rasīd al-Dīn*. New York & London, Columbia University Press.
Cerensodnom, D. & Taube, M.
1993 *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*. Berlin, Akademie Verlag. [*BTT* XVI]
Clauson, G.
1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford.
Cleaves, F.W.
1954 The *Bodistw-a Čari-a Awatar-un Tayilbur* of 1312 by Čosgi Odsir. *HJAS* 17, pp. 1-129 +24pls.
Doerfer, G.
1963-1975 *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen* 1-4. Wiesbaden.
Franke, H.
1978a A Sino-Uighur family Portrait: Notes on a Woodcut from Turfan. *The Canada-Mongolia Review* 4-1, pp. 33-40.

1978b From Tribal Chieftain to Universal Emperor God: The Legitimation of the Yüan Dynasty. *Bayerische Akademie der Wissenschaften, Phil-hist.Klasse, Sitzungsberichte* 2, München, pp. 3-58.

1981 Kleine Nachlese zu der mongolischen Mahākālī-Hymne aus Turfan. *ZAS* 15, pp. 11-26.

1997 Zu den yüanzeitlichen Drucken des chinesischen buddhistischen Kanons. P. Kieffer-Pülz & J.-U. Hartmann (eds.) *Bauddhavidyāsudhākaraḥ: Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday.* (Indica et Tibetica 30), Indica et Tibetica Verlag, Swisttal-Odendorf, pp. 123-135.

Gabain, A. von.

1967 *Die Drucke der Turfan-Sammlung.* (Sitzungsberichte der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst. 1967:1), Berlin.

Haenisch, E.

1954 *Mongolica der Berliner Turfan-Sammlung 1: Ein buddhistisches Druckfragment vom Jahre 1312.* Berlin, Akademie Verlag.[*ADAW* 1953, No.3]

Kara, G. (Кара, Д.)

1968 (Review) Annemarie von Gabain. Die Drucke der Turfan-Sammlung. *Народы Азии и Африки* 1968-5, pp. 205-207.

Krader, L.

1955 Qan-Qaγan and the beginnings of Mongol Kingship. *CAJ* 1-1, pp. 17-35.

Ligeti, L.

1971 Autour du Säkiz Yükmäk Yaruq. L. Ligeti (ed.) *Studia Turcica*, Budapest, pp. 291-319.

Mostaert, A. & Cleaves, F.W.

1962 *Les Lettres de 1289 et 1305 des ilkhan Aryun et Öljeitü à Philippe le Bel.* (Harvard-Yenching Institute, Scripta Mongolica Series 1), Massachusetts, Harvard University Press.

Pelliot, P.

1930 Notes sur le "Turkestan" de M.W.Barthold. *TP* 27, pp. 12-56.

1959 *Notes on Marco Polo* 1. Paris.

Rachewiltz, I. D.

1982 The preclassical mongolian version of the *hsiao-ching*: In Memoriam A. Mostaert, 1881-1971. *ZAS* 16, pp. 7-109.

1983 Qan, Qa'an and the seal of Güyüg. K.Sagaster & M.Weiers (eds.) *Documenta Barbarorum. Festschrift für Walther Heissig zum 70.Geburtstag.* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 18), Wiesbaden, Otto Harrassowitz, pp. 272-281.

Radloff, W.

1911 *Kuan-ši-im Pusar: Eine türkische Übersetzung des XXV. Kapitels der chinesischen Ausgabe des Saddharmapuṇḍarīka.* (Bibliothetica Buddhica 14), St.Petersburg.

1928 *Uigurische Sprachdenkmäler.* Leningrad.

Röhrborn, K.

1977- *Uigurisches Wörterbuch.* Wiesbaden.

Sertkaya, O.F.

1989 Ein Fragment eines alttürkischen Lobpreises auf Tämür Qaγan. *AoF* 16-1, pp. 189-192.

Zieme, P.

1975 Zur buddhistischen Stabreimdichtung der alten Uiguren. *AOH* 29-2, pp. 187-211.

1981 Bemerkungen zur Datierung uigurischer Blockdrucke. *JA* 269, pp. 385-399.

1982 Zum uigurischen Samantabhadracaryāpraṇidhāna. *Studia Turcologica Memoriae Alexii Bombaci Dicata*, Napoli, pp. 599-609.

1985 *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren.* Berlin, Akademie Verlag. [*BTT* XIII]

1990 Probleme alttürkischer Vajracchedikā-Übersetzungen. A. Cadonna (ed.) *Turfan and Tun-Huang the Texts: Encounter of Civilizations on the Silk Route.* (Orientalia Venetiana 4), Firenze, pp. 21-42.

1991 *Die Stabreimtexte der Uiguren von Turfan und Dunhuang. Studien zur alttürkischen Dichting.* Budapest, Akadémiai Kiadó.

1992 *Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo: Kolophone und Stifter des alttürkischen buddhistischen Schrifttums aus Zentralasien.* (Abhandlungen der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften 88), Opladen.

1995/96 Donor and Colophon of an Uigur Blockprint. *Silk Road art and archaeology* 4, Kamakura, Journal of the Institute of Silk Road Studies, pp. 409-424.

Zieme, P. & Kara, G.

1978 *Ein Uigurisches Totenbuch. Nāropas Lehre in uigurischer Übersetzung von vier tibetishen Traktaten nach der Sammelhandschrift aus Dunhuang Britisch Museum Or.8212(109).* Budapest.

略号表

『阿毘達磨』：庄垣内 1991-1993.

ADAW : *Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin*, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Berlin.

AM : *Asia Major.*

AoF : *Altorientalische Forschungen*, Berlin.

AOH : *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Budapest.

BTT : *Berliner Turfantexte.*

BTT XIII : Zieme 1985.

CAJ : *Central Asiatic Journal.*

ED : Clauson 1972.

HJAS : *Harvard Journal of Asiatic Studies.*

JA : *Journal Asiatique.*

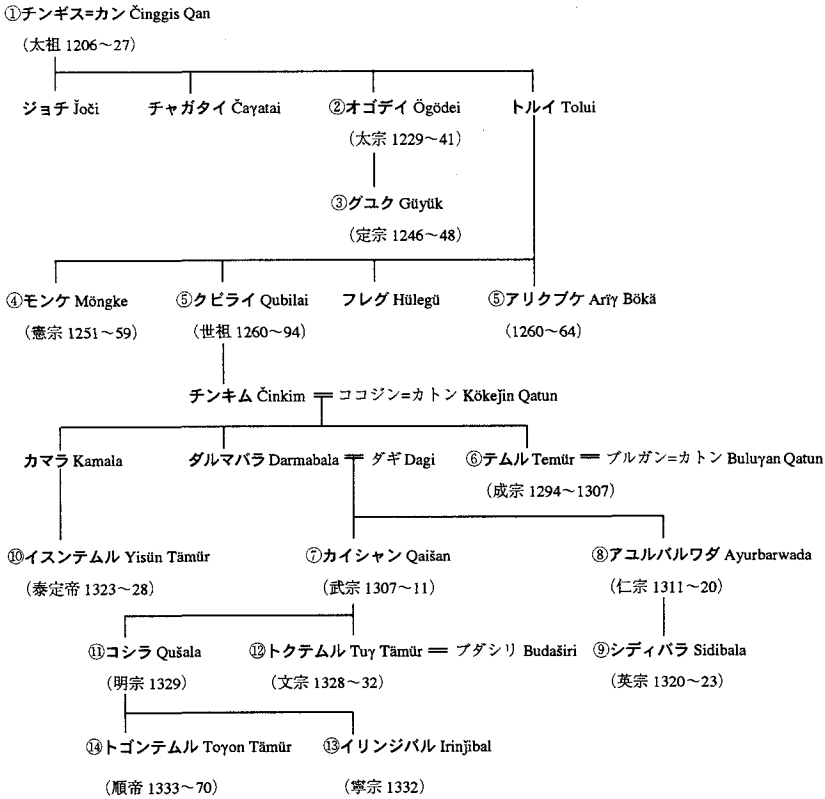
TMEN : Doerfer 1963-1975.

TP : *T'oung Pao.*

UW : Röhrborn 1977-.

ZAS : *Zentralasiatische Studien.*

関係系図



※男性はゴシック体

カッコ内は廟号，在位年

Summary:

Historical Backgrounds of the Publication of Uigur Buddhist Texts Commemorating Temür Qaγan's Enthronement : Re-examination of the Colophons Found in U 4688 [T II S 63] and *U 9192 [T III M 182]

Kentaro NAKAMURA

This article dealt with some problems concerning Uigur blockprint colophons U 4688 [T II S 63] and *U 9192 [T III M 182] unearthed from Turfan, which were studied by A. von. Gabain and O. F. Sertkaya respectively, and it tried to evaluate them in the context of Afro-Eurasian regions during the Mongol Period.

In the first chapter, I revised the texts and appended philological and historical notes as follows : (1) The word ČYT'N, which appears in U 4688 [T II S 63], is a loan word from Sanskrit *cetanā* meaning 'a will, a volition'. (2) It is stated in U 4688 [T II S 63] that Temür Qaγan was a legitimate successor of Činggis Qan, Qubilai and Činkim, but it seems somewhat strange because Činkim did not actually accede to the throne of Qaγan. The reason why Činkim was of the same rank as Činggis and Qubilai, might reflect the intention of Kökejin Qatun, who held real power in the Temür Government. She was from the Qonggirad clan, the wife of Činkim and mother of Temür. (3) On the fact that Temür Qaγan is likened to Cakravartin both in U 4688 [T II S 63] and *U 9192 [T III M 182], I suggested that the Temür Government followed precedent in the era of Qubilai. Qubilai was likened to Cakravartin by 'Phags-pa. (4) The date of U 4688 [T II S 63] is identified as 1295.

In the second chapter, identifying the date of U 4791 as 1308, I limited the date of Uigur Buddhist blockprints as being from the latter half of the 13th to the former half of the 14th Century, which has been supposed to belong to the Mongol

Period until now. The place of publication was presumably Ta-tu (大都).

In the third chapter, I compared two colophons with other contemporary sources, and evaluated the value of the colophons as historical materials. According to the Chinese sources, Qubilai ordered Uigur brains to translate Tibetan and Sanskrit Buddhist scriptures and works of 'Phags-pa into Uigur and Chinese, and let them publish when he founded Dai Ön Yeke Mongol Ulus (Yüan Dynasty). This publication was probably a part of the projects by which Qubilai intended to strengthen his own royal authority, and to create an atmosphere of appearance of new state and emperor. I concluded that the Temür Government (possibly Kökejin Qatun and her 'Qonggirad Clique'), following Qubilai's projects, published Uigur Buddhist blockprint scriptures in commemoration of the enthronement of Temür Qaγan in 1295. It is likely that successive Qaγans, Princes, and Empress Dowagers might have published Buddhist scriptures in commemoration of their enthronements.

Recently, it has been proved that the Yüan Dynasty was extremely eager to produce publications, contrary to the generally accepted opinion. Indeed, a great variety of books were massively published in China after the 14th Century under the leadership of the Yüan Government. My conclusion that U 4688 [T II S 63] and *U 9192 [T III M 182] were the colophons of Uigur Buddhist blockprint scriptures published by the Temür Government in commemoration of the enthronement of Temür Qaγan agrees with the image of history of publishing under the Yüan Dynasty.